

令和七年 上野天神祭 楼車 (だんじり)

一番桐本

KIRIMOTO
きりもと

HIGASHIMACHI
東町



しるし 逆襲斗 (さかさのし)

天保11年(1840)に発行された天神祭の版画「伊賀上野天満宮祭礼九月廿五日行路記」に扇面に文字の「のし」を逆さに添えた図が残っており、これに基づき昭和53年(1978)に演進萬吉画伯の匠案設計により文字から鮫襲斗に改め復興しました。

だんじり 桐本 (きりもと)

神輿に生い茂る桐の大樹に掛りところを得たものである。文政10年(1827)9月新調。屋根 唐破風、妻「前」雲に麒麟、「後」波に犀の彫り物。柱6本。

鬼板 鬼面の彫物。

懸魚 菊花の透かし彫り。

天井 切こまの松竹梅の蒔絵。人形師・筒井裕久造画。

天幕 牡丹に唐獅子(縫刺繍)。

胴幕 蘭亭曲水の宴(刺繍、伊賀の画家大北張堂の下絵)。

旗の間 だんじり下層正面、天井には菊花の絵。擬宝珠勾欄付の張り出し。

▼みどころ

東町のだんじり「桐本」は文政10年(1827)伊賀の仏師筒井儀兵衛らにより作られました。その当時菅原神社の境内には桐の太木があり、そこから神社のおひざ元の地区である東町のだんじりは「桐本」と名付けられました。上野天神祭の他の8基のだんじりと比べ大きく異なるのは胴幕です。水引幕が無く、正面の袖幕から3面を連続した蘭亭曲水の宴の柄の大幕で覆っています。もう一つの特徴は桐本のだんじり囃子です。上野天神祭の他の8基のだんじり囃子が祇園囃子の流れにあるのと異なり、二連揃、太鼓、篠笛に鼓、三味線が加わった五楽奏です。曲の調子もゆったりとした雅やかなもので他とは趣を異にします。参考に桐本の曲を聴く位置は「桐本」の後方からが最適です。少し離れた後方から味わってください。

二番紫鱗

SHIRIN
しりん

UOMACHI
魚町



しるし 琴高仙人 (きんこうせんになん)

琴高仙人が鯉に乗って水中から現れたという故事にもとづく。

文化10年(1813)9月新調。

だんじり 紫鱗 (しりん)

鮮魚の美称、魚町の表現。又の名を「庶尹允諧」という。諸々の役人が一堂に会して調和すること。

屋根 唐破風。せり上げ万力で屋根を掲降する。

懸魚 菊花に飾葉。

天幕 雲竜(刺繍)。裏面は丸龍蜀江(刺繍)。嘉永4年(1851)。

水引幕 群賢、琴基書画(刺繍)。

胴幕 黄石公、張良、蝦蟇仙人、鉄拐仙人、牡丹に孔雀、御殿鷹(刺繍)。

前幕 両脇に閑羽、張飛、劉備玄德(緋羅紗地に刺繍)。

見送幕 群仙図(刺繍)。

勾欄 総金具。「金具第一」である。

柱 龍金具「上り龍」「下り龍」。

囃子 祇園囃子。

▼みどころ

「紫鱗」とは鮮魚の美称で魚町のだんじりに最もふさわしい表現です。又の名を「庶尹允諧」(諸々の役人が一堂に会して調和する事。)とも言い、その文字が前後の妻梁の上部に書かれています。「紫鱗」の特筆すべき見どころは囃子座の4本の化粧柱です。雲の間を飛翔する「龍」を文様化した飾金具が巻かれています。胴幕も5枚に分かれて中国故事の英傑らが描かれており総金具の勾欄、天幕と合わさって重厚・豪華なだんじりです。

三番鉄英剣鋒

TETSUEIKENBOKO
てつえいけんぼこ

MUKAUJIMACHO
向島町



しるし 日・月・鳳 (じつ・げつ・せん)

平成元年(1989)に演進萬吉画伯の意匠により再興されました。天神様は日月の運行を司る神様で中国に由来する采配の具「唐扇」をあしらっています。行列曳行時、唐扇はゆっくり回転しながら巡行します。

だんじり 鉄英剣鋒 (てつえいけんぼこ)

英は花房の意、従って花鋒を意味する。花鋒は宝暦6年(1756)、現在の鉄英剣鋒は安政6年(1859)。

屋根 てり破風。

前額 「探深(たんめい)」暗がりを探り。

後額 「剪莽(せんぼう)」草を刈る。

眼象 梅鉢紋。

天幕 花丸雲獸図(刺繍)。

水引幕 波之鯉図(刺繍)。

胴幕 漢公尚徳図(刺繍)。

前幕 四季農耕図(刺繍)。

見送幕 鳳凰群仙琴鶴図(綴織)。

囃子 祇園囃子。

▼みどころ

「鉄英剣鋒」の歴史は宝暦6年(1756)に作られた「花鋒」に始まります。それからおよそ100年後の安政6年(1859)に現在の「鉄英剣鋒」が長田に屋敷を構えた安場武右衛門によって建造されました。屋根は切破風で古い鋒車の形を良く伝えています。前後の化粧梁には向島町に居住した藤堂藩の儒者兼兵法家高見照陽の書による「深沢(たんめい)」「剪莽(せんぼう)」の扁額が掛けられています。暗がりを探り生い茂る草を刈るという開拓の精神を表しています。このだんじりの特色の1つは囃子座の欄縁の四隅にある黄金に輝く御幣で、他のだんじりには無いものです。四神(中国の神話で天の四方の方角を司る靈獣、東の青龍・南の朱雀・西の白虎・北の玄武)を鎮める為のもので鋒車の伝統的な様式です。屋根上に立てる剣は、足揃えの儀には銀の剣。本祭には金色の剣を飾ります。

四番二東・月鉾

NITOU TSUKIHOKO
にとう・つきほこ

KAJIMACHI
鍛冶町



しるし 月鉾 (つきほこ)

平成2年(1990)に従来だんじりの屋根にそびえた「月鉾」を原型に、演進萬吉画伯の意匠により復興されました。

だんじり 二東 (にとう)

「二東」は鍛冶町の古い町名の二之東町から名付けました。本来は三日月形の鉾を建て、「月鉾」と称します。新復興したしるしを「月鉾」としたため、それとの混同を避ける為新たに「二東」をだんじりの名称としました。(現在はどちらの名称も使っています。)

「二東」の評価を上げたのは何といっても県の文化財に指定されている見送幕「雲竜文」です。明時代(1368~1644)の刻糸(中国のきわめて精巧な高級織物、綴織)で孔雀の羽毛を混ぜて織られています。

屋根 唐破風。化粧梁上のとばめ板に牡丹に唐獅子。

懸魚 三日月紋。

眼象 葉牡丹の透かし彫り。

天幕 前面が「鳳凰に桐図」、左右・後面が「御殿鷹図」(ともに緋羅紗地に刺繍)。

水引幕 欽中八仙図(刺繍)、明治19年(1886)。

胴幕 薩(まがき)に菊圖(刺繍)。陶朔明の飲酒詩「采菊東籬下悠然見南山」にならう。

前幕 白象に唐子(平成15年(2003)復元新調)(刺繍)。

後幕 龍虎(呉道子、陳平)(刺繍)。

見送幕 雲龍文 中国明時代(1368~1644)(綴織)。孔雀の毛を混ぜて織ったもので、三重県指定文化財です。現在、だんじり会館にて常設展示しています。祭礼巡行に使用の見送幕はこれを基に、昭和37年(1962)新調しました。

囃子 祇園囃子。囃子方の組織を二東社という。

▼みどころ

だんじり二東・月鉾のみどころは前後の幕です。前幕「白象に唐子」は江戸時代後期(19世紀前半頃)に製作された刺繍幕でしたが、平成15年から2年余りの年月をかけ、見事に復元新調されました。白象と唐子や人物、樹木に至るまで忠実に再現され、特に白象の立体的な表現は、特別な盛上げの技法が駆使され、白亜の輝きに魅了されます。

五番其神山・葵鉾

KISHINZAN AOIBOKO
きしんざん・あおいぼこ

NAKAMACHI
中町



しるし 菊慈童 (きくじどう)

現存する上野天神祭のしるしで圧巻。享和2年(1802)管公九百年を契機として作られた伝えがあります。しるしの見送幕は中国明時代(1368~1644)の官服で作られたといわれます。(群青、赤、黄、紫等々の真向きの龍の蝦夷鉾)以前はだんじりの見送幕であった。

だんじり 其神山・葵鉾 (きしんざん・あおいぼこ)

いかなれば そのかみやま(其神山)のあふひくご としはふれどもふたばなるらん

「其神山」は上賀茂神社の枕詞で「葵鉾」は賀茂祭の葵蔓で「いかなれば」の起句を伊賀と結びつけ、だんじりの名を付けたといわれる。

宝暦9年(1759)に其神山を造る。

鬼板 宝珠。龍の彫り物、破風尻(ひさし全体)で飾りつけ。

屋根 てり破風。

天井 切こまの百花図。

天幕 群鳥(刺繍)。

前幕 山水に麒麟(刺繍)。

水引幕 百花群芳図(刺繍)。

胴幕 帰去來の図、山園小梅の図(綴織)。

後幕 呉道子龍を描く図(刺繍)。

見送幕 牡丹・孔雀・松(錦織)。

囃子 祇園囃子。

▼みどころ

宝暦9年(1759)に其神山が造られました。その後改築等を経て現在に至っています。見どころは風格ある大型の屋根です。鬼瓦には頂部に雲と宝珠、両流れに精巧な竜の彫物を配しています。高さもあるたむときわ男社で大変素晴らしいだんじりです。

後の扁額に新古今和歌集の歌「いかなればそのかみやまのあふひくご」としはふれどもふたばなるらん」が彫り込まれています。「其神山」は上賀茂神社枕詞で「葵蔓」は賀茂祭の葵蔓で「いかなれば」の起句を伊賀と結びつけ、だんじりの名を付けたといわれています。

六番小簀山

KOMINOYAMA
こみのやま

KODAMACHO
小玉町



しるし 三社の託宣 (さんしゃのたくせん)

三社の託宣とは伊勢神宮、石清水八幡宮、春日大社の三社の神のお告げです。小玉町のしるしは町の紋形である分銅型の外郭の中に天照皇大神と八幡大菩薩、春日大明神を配置しています。

だんじり 小簀山 (こみのやま)

芭蕉翁の名前にちなんで名づける。「初しぐれ猿も小簀をほしげ也」。

屋根 唐破風(からふは)。

眼象 分銅(小玉)紋。足元に雲形の彫刻。

懸魚 雲に鶴の透かし彫り。

天幕 桐に鳳凰図(緋羅紗地に刺繍)。

水引幕 西園雅集図(刺繍、森寛斎下絵)。

胴幕 右左に象と雀・虎(二十四孝のうち大舜・楊香の図)(緋羅紗地に刺繍、前川五嶺下絵)。讀は「忠則順天孝則生福、天降大孝萬方策」(賈名松翁下書)。

前幕 龍と亀(緋羅紗地に刺繍)。胴幕の雀(朱雀)、虎(白虎)、前幕の龍(青龍)、亀(玄武)で四神をあらわす。

見送幕 朝鮮通信使図(刺繍)。

囃子 祇園囃子。

七福神 寛延4年(1751)に始まった練り物。現在は、特別な年に印と楼車の間を練る。

▼みどころ

だんじり「小簀山」の見どころの一つは、見送幕です。本祭の巡行に掛ける刺繍の見送幕は、朝鮮通信使を描いています。鎖国体制の江戸時代において、日本にやって来る外国人は、非常に珍しいものでした。朝鮮通信使の行列は、伊賀地域を通行することこそありませんでしたが、この幕をながめながら、当時の人々は外国からの賓客に思いをはせたことでしょう。もう一つは、曳方の法被です。曳輪を持つ曳方の法被には、楼車の名前の由来となった松尾芭蕉の名吟「初時雨ささるも小簀をほしげなり」が、小玉町の象徴である分銅紋とともに染め抜かれています。すでに登録されています上野天神祭同様に、登録に向けた動きのある「俳句」もユネスコ無形文化遺産に登録されると良いですね。

七番薙刀鉾

NAGINATABOKO
なぎなたぼこ

SHINMACHI
新町



しるし 白楽天 (はくらくてん)

中国の詩人、白楽天像の大作。嘉永4年(1851)9月、京都丸屋利兵衛の作。近年、松の木を添える白楽天に形容を変え、衣裳も新調しました。

だんじり 薙刀鉾 (なぎなたぼこ)

見送幕墨書銘から天明3年(1783)の頃、創建されたと考えられており、唐破風屋根中央に、薙刀を立てた姿は豪華な幕と相まって壮観です。

屋根 唐破風。

懸魚 新字の浮彫り。足元に雲形の彫刻。

眼象 牡丹の透かし彫り。

天幕 前後は旭日に鳳と凰、左右は麒麟遊戯の図(緋羅紗地に刺繍)。裏面は鳥獣花樹図(緋羅紗地に刺繍)。

水引幕 富士の裾野の巻狩(刺繍)。安政4年(1857)に京都の縫師宮崎屋房三郎にて新調。

二番水引幕 (前)と胴袖幕 雲竜波清文図(刺糸)16世紀後期のもの。

前幕 黄石公に張良が舌を捧げる図(綴織)。

▼みどころ

だんじり「薙刀鉾」最大の見どころは豪華な幕です。上野天神祭の全てのだんじりとしてに使われている最高級の織である刻糸6点の内5点が、その他の綴織12点の内6点が新町のだんじりとしての懸装品(幕)です。その中で圧巻は見送幕「蘭人巖上に遊ぶ図」です。平成28年(2016)に3年の年月をかけて現代日本の最高技術をもって1783年の新調当時のすばらしさを再現しました。一見の価値があります。是非ご覧下さい。

八番三明

SANMEI
さんめい

FUKUICHO
福岡町



しるし 三明幟山 (さんめいのぼりやま)

幟の文字は「福居町」。この文字は松尾芭蕉の筆ではないかと伝えられている。幟は緋羅紗。作成当時の幟が保存されていたので、台車を平成2年(1990)に制作し三明幟山と名付けました。

だんじり 三明 (さんめい)

日・月・星(天体の表現)。欄縁の金具は三重県指定文化財。地車。せり揚げ万力をもつて綱あげする工法。車体車軸を樺材で受けて弾力性のある技法を採用。

屋根 唐破風。とばめ板に菊葵の絵。庇(ひさし)には、銅鍍銀(どうとぎん)の星宿(星座)屋根のせり上げを現在も伝承。

鬼板 前は金箔の日、後ろは銀箔の月、前述の星宿と合わせて「日・月・星」をだんじりの象徴としている。

天井 格天井造り。金箔の地に極彩色の扇面花鳥図。

天幕 雲龍圖(刺繍、伝「貴名海屋」(ぬきなかいおく)の下絵)。

水引幕 三十六歌仙図の幕と西園雅集図の幕がある(ともに刺繍)。

胴幕 虎竹圖(刺繍、伝「円山応挙」の下絵)。虎の刺繍の厚みや、虎の表情が見所。

欄縁 飾金具二十四個は、三重県指定文化財。金・銀・銅・珊瑚を使い、毛彫りなどの高度な技法による作品。四隅には、四神(玄武・朱雀・青龍・白虎)を表す飾金具。

囃子 祇園囃子。摺鉦(すりがね)は、四個。綿太鼓。龍笛。

▼みどころ

「日・月・星」「天・地・人」の世界観が江戸時代の表現のままで感じられるだんじり「三明」は、至って簡素な造りに極度の精巧で優美な幕や金具で飾られた、荘厳という言葉がぴったりの気品漂うだんじりです。そんな「三明」の見所の一つに、巡行時に角を曲がる時の「辻廻し」があります。ちよっと大きめで重量感溢れるだんじりを操るのは至難の技。コース取りから停止位置決め「万力」を奪うし、一気に90度だんじりの向きを替える一瞬は、指揮・テコ方・万力方・曳き手の腕の見せ所、片時も目を離しません。囃子方も賑やかな曲で花を添えます。また、そんな緊張感溢れるいの時でも、法被の背中では愛敬溢れる「お多福」が、その場を和ませてくれます。「福居町」の名前を表したデザインで、豪華なだんじりに圧倒されそうな時は、幸せをぶ「お多福」に視線を移してみればいかがでしょうか。これも、我が町の見所です。

九番花冠

KAKAN
かかん

NISHIMACHI
西町



しるし 羯鼓 (かっこ・諷鼓)

文久3年(1863)9月に再調した。高木長雄の記した由来書には別文のいわれがあります。

西町しるし「羯鼓」のいわれ

諷鼓苔深鳥不驚

昔、殿様の政治を諷しめる為住民が太鼓をたたいていました。殿様の政治がよければ諷しめることがなく、太鼓の上に鶏が止まって、苔はえるさまは世の中が平穏である。その故事を引用して、形どったもの。

だんじり 花冠 (かかん)

鼓を身につけて踊る羯鼓舞の花冠にちなんで名づけられました。

屋根 唐破風。柱6本。

眼象 梅鉢紋。破風飾金具に同じ紋所を表す。

懸魚 牡丹の透かし彫り。

天井 鶴のしるし「羯鼓(かっこ・諷鼓)」の存在感を際立たせています。

天幕 雲獸百弁(百弁：もろもろの草)(緋羅紗地に刺繍)。

水引幕 蘭亭曲水の宴。東喜の永和9年(353)の賢仙41人を描いた密画(刺繍)。

胴幕 梅(刺繍、伝「応挙十哲」渡辺南岳下絵)。

後牛(刺繍、伝渡辺南岳下絵)。

勾欄 金具は手彫り打出し。本鍍金。文政2年(1819)の銘あり。上段勾欄。下段、擬宝珠勾欄。簾の間。

囃子 祇園囃子。

▼みどころ

鼓を身につけて踊る羯鼓舞の花冠にちなんで名づけられました。宮殿を擬した華麗な簾の間があるだんじりです。毛彫り打出しに本鍍金された飾金具が多く使われています。特に欄縁・跳勾欄の金具は水引幕の細かな蘭亭曲水の宴の織と共に「花冠」の存在感を際立たせています。尚、当時のしるし「羯鼓(かっこ・諷鼓)」も見どころの一つです。しるし台の勾欄を飾る金具も「花冠」同様本鍍金の毛彫り打出し金具であり美術的価値の高いものです。